

タイトル「扉をしめて」（仮）

他候補「なんとなく死にたいけど、とりあえず生きています」

「そのドアを閉めたら」

「明日、いなくなるかもしれない君へ」

【登場人物】

小笠原幸（オガサワラサチ） バトン部。正義感が強く面倒見がいいが本当は自分が一番大事。早くこの街から出たいと強く願っている。「幸」を「みゆき」と読み間違えられることが多いので、手紙やラインの時はカタカナで「サチ」と表現するようにしている。

水沢志帆（ミズサワシホ） バトン部部長。学級委員をしているが正義感はない。クールで他人に興味がない。少女漫画が好きで意外と乙女な一面を持っていて、片桐のちょっと悪ぶったところに惹かれている。将来は通訳になりたいと思っていて、英語が得意。それを活かして、片桐の好きなバンドの和訳を引き受けている。

片桐龍生（カタギリリュウセイ） 世界で活躍する人気ロックバンドに憧れていて、自分もいつかアーティストになりたいという夢を持っている。家庭環境がよくなく、継父に暴力を振るわれている。海月からお金をとっている。

海月慶人（ウミヅキケイト） 通称クラゲ。髪が長くて色白で華奢なためみんなから女みたいとからかわれている。「美しいまま死にたい」と口にしたり、意味深な発言で幸に近づいたり謎が多い。

南條百合（ナンジョウユリ） 帰国子女。父親が音楽家で海外を転々としている。ピアノの英才教育を受けているが、音楽よりも文学に興味がありいつも図書館で過ごしている。ショートカットがよく似合うカッコイイ孤高の美少女。

【あらすじ】小笠原幸、中学三年生は、家庭のことや進路のことで悩みを抱えている一見普通の中学生だが、人には言えない秘密を抱えていた。

引退寸前でバトン部を辞めることを顧問で担任の山田広子(ヤマダヒロコ)先生に考え直すように言われるが、決断を変える気はないと答える。

街中の至る所に書かれた「殺」というスプレー文字や、放課後に聴こえるピアノのメロディなど変な噂話が学校で広まる。

そんな中、親友の水沢志帆とケンカしてしまう。どうやら、志帆はクラスメイトの片桐龍生に恋をしてしまったらしい。幸と片桐は幼馴染だがとくに仲がいいわけではなく、むしろ中学に入ってから調子に乗っていることが気に入らない。

片桐からお金を取られているのは、クラスでも影の薄い海月慶人。

幸の憧れの南條百合は帰国子女。綺麗な容姿をしているのに男の子っぽい格好をしているのがミステリアスで、仲良くなりたいと思っている。ある日、放課後の音楽室で聞き覚えのある曲が流れてくる。それは、監禁されているときに流れていた忌まわしい記憶を思い出させるメロディだった。どうして、この曲を？蘇る記憶の中に一人の女の子がいた。幸と一緒に監禁されていた同い年くらいの女の子。無我夢中で逃げたせいで女の子を置いてきてしまったことを後悔していた。思い出さないようにしていたのにピアノを聞いて記憶の蓋が開いた。百合が小学校の途中からアメリカに行っていたということを知り、もしかしたらあの時の女の子かもしれないと思うようになる。確かめたいけど確かめる勇気がない。

片桐は「殺」と書かれた場所でいつも歌の練習をしていた。突然、金髪にしたリカツアゲをしたり、様子がおかしすぎることから、幸は片桐が誰かを殺そうとしているのではないかと心配になる。

ニュースでは、連日、女兒の行方不明事件を伝えていた。

果たして、「殺」は誰が書いたメッセージなのか？

百合は、あの時の女の子なのか？

女兒誘拐事件の犯人は？